

■ 神奈川県大学図書館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL (045)481-5661(代表)
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2946 TEL (0463)59-4111(代表)
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

EU加盟前の中欧を訪ねて

秋山 憲治

昨年、ハンガリー、オーストリア、チェコ、スロバキア、ポーランドの中欧5カ国を訪ねた。私の教え子がスロバキアにある米・日合弁の自動車部品製造企業に赴任しているとの連絡があり、訪問する絶好のチャンスだと思った。

われわれの世代は、「ハンガリー動乱」や「プラハの春」などソ連の権力に抵抗し自由を求めた運動に、ロマンや強い感慨をおぼえ、ぜひ行ってみたく思っていた。また、中世を色濃く残している町とはどのようなものか。かつて社会主義圏で、その後市場経済に移行し、2004年5月EU加盟を目前にしている国がどのようなのだろうか。今後これら諸国はどうなるのだろうか等々、興味は尽きなかった。

まず、最初の印象は、景色や町並みの美しさだった。初めに到着したブタペストの町の美しさに目を見張った。中世の家並みや石畳、お城や教会、ゆったりと流れるドナウ川、私もいろいろな国に行ったがもっとも美しい町のひとつであろう。ウィーンやプラハも美しいが、ポーランドの宗教都市クラクフはさらに中世の色合いを強く残した美しい町であった。14世紀に設立され、中欧最古の大学の1つであり、コペルニクスやヨハネ・パウロ2世も学んだというヤギェウォ大学もある。

チェコとポーランドの国境に近いスロバキアの小都市マルチンに教え子の工場はあった。自動車のシート・カバーを製造している。約760名の労働者が働いているが、派遣された3名の日本人は

現地の事情に合ったトヨタ生産方式を模索し、マニュアル化するのに四苦八苦しているとのことだった。現地の人たちは、自分や家族を犠牲にしてみても働くことはないが、勤勉とのことである。

マルチンは人口6万人の小さな町であるが、イギリスのスーパーのテスコが進出して、24時間営業している。品物は豊富で米国などのスーパーとほとんど変わらない。自動車を持っている人が少ない所で夜中に営業しても客は来るのだろうか心配になる。ここでは大手製造業や金融、エネルギー、流通業など重要産業はほとんどドイツや英国、米国などの外資にすでに買収されているとのことである。

EU加盟に伴って、多くの人が出稼ぎに行くのではないかと心配されているが、彼らは土着性が強いとのことだった。かつて社会主義国であったことから社会福祉も発達しており、また言葉の問題があるのであまり移動しないのではないかと考えていた。むしろ医者など高学歴の人たちが高給を求めて移動してしまうのではないかと心配していた。

旅の移動にバスや鉄道を利用したが、鉄道はマニアが喜びそうな旧式の列車が多く走っていた。車窓は、荒野のような風景やそのなかで日本とは違い背の低い食用オイル用のひまわりの花が印象的だった。なお、当地は美人の女性が多かった。繰り返された混血のなせるわざなのだろうか。

(経済学部教授・貿易政策)

『宗教・人権・憲法学』

芦部信喜著 有斐閣

B323.1 - 578 323.14 - A92 323.14 - 92

矢口俊昭

本書は芦部信喜先生の論文集の一冊です。著者についてはつとに有名ですから、あえて説明する必要もないかもしれませんが、ここは面倒がらずに、ごく簡単に紹介しておきます。

芦部先生は1923年に長野県にお生まれになり、東京大学をご卒業後、同大学法学部の助手、助教授そして教授として憲法の研究・教育に携わり、定年後は学習院大学で1994年まで教授を務めて、1999年6月に大変残念ながら75歳でご逝去されました。先生の憲法学は、戦後第一世代の宮沢憲法学を引き継ぎ、学会を常にリードしてきました。そればかりでなく、司法試験をはじめ多くの国家試験の試験委員や種々の審議会委員などをなさり、社会的領域における業績も多大です。教科書「憲法」(岩波書店)は司法試験のみならずあらゆる国家試験受験者のバイブルといってもよいほどです。研究論文集は全9冊、憲法の全領域をカバーし、後進の研究者にとって導きの書となっています。先生の名前と共に常に語られる研究上の業績として、一つだけ挙げますと、憲法学の領域に憲法訴訟論という分野を開拓したことでしょう。それまで、人権制約を内容のはっきりしない「公共の福祉」などの抽象的な基準によって正当化してきた裁判の場に、いかに人権価値を実現していくかを審査基準などを用いつつ具体的に考える方向を示し、実現に努力されたことです。

ここで紹介する本書は講演の記録に数編の論文からなっています。主要テーマは国家と宗教をめぐるもの(第1部)、人権論とその判例法理(第2部)そして憲法学などについてのもの(第3部)ですが、なかでも、第一部の「閣僚の靖国神社参拝問題に関する懇談会(靖国懇)」(官房長官の私的諮問機関)での先生の立場についての論考および国家と宗教についての諸論考は注目されます。

先生は津地鎮祭事件の最高裁判決(昭和52年)から、この種の事例では目的効果基準の厳格な適用を主張してきて、靖国懇においてもその主張を通し、そして愛媛玉串料訴訟最高裁判決(平成9年)をこの基準の適用として評価します。そして「私は目的効果基準を批判した意見を評価しますが、だからといって、目的効果基準そのものをすぐに捨ててしまうというのではなく、それを…厳格に適用するアプローチを今後発展させていく意味も十分あるのではないか」(118-119頁)といっています。このように、先生の政教分離に関する立場は一貫していて、判決に与えた影響も少なくなかったと想像します。第2部の人権論と人権判例法理については、やさしい言葉で、かつ歴史的、巨視的な視点から人権に関する判例理論の整理がわかりやすく述べられていて、学生が全体的・概括的な理解にたつて、憲法の勉強をすすめるのに非常に有意義と思います。

私などには、第3部の憲法や憲法学についての回顧を大変興味深く感じますが、学生諸君には身近ではないかもしれません。紹介はこの程度にして、あとは読んでください。最後に、本書をなぜ一冊に選んだかについて簡単に申しますと、講演記録などが多いことから、文章が平易であり、内容が概括的で、それぞれ完結していますので、学生にとって理解がし易いこと、また政教分離や表現の自由などテーマが今日的であり、かつ追記での補充により内容もアップトゥデートなものになっていることです。さらに、私事ながら、加えまして、本書は確か先生がお亡くなりになってから、頂戴したはずですが、すぐに「はしがき」を読み、胸が締めつけられたという、想い出深い本でもあるからです。

(法務研究科教授・公法学)

『ご冗談でしょう、ファインマンさん —ノーベル賞物理学者の自伝—』

R.P.ファインマン著 大貫昌子訳 岩波書店
B420.28 - 1~2 - 36 289 - F 23 - 1~2

鳥居祥二

R.P.ファインマンは、物理学を学ぶものならば誰一人として知らぬものがない程の有名な物理学者で、1965年に「量子電磁気学における基礎的研究」により、朝永振一郎、J.S. シュウィンガーとともにノーベル物理学賞を受賞している。この本は彼の回想録であるが、友人の物理学者であるR. レートンとの会話の中で話されたエピソードを、「気のおもむくままに」集めてある。レートンをして「ただ一人の人間が、一生の間によくもこれだけ傑作で、しかもとほうもない事件に出くわしたものだ。」と言わしめたほど、さまざまな話が登場する。それは、この本の原書の副題が、「奇妙な性格を持った人間の冒険話」となっていることからわかる。決して自分の人生や研究の話を、成功物語として書いた本ではなく、物理学に関する知識を身につけるための本でもない。著者が経験した出来事に対して、まさにファインマン流で対処した冒険譚とでも言うべき内容である。

本の題名にもなっている「ご冗談でしょう、ファインマンさん」は、彼がプリンストン大学の大学院生になったばかりの時に、招待された伝統的な茶会の席での逸話である。大学院長の夫人から、「紅茶にはレモンを入れましょうか、それともクリームにしましょうか？」と聞かれて、「はい、両方いただきます。」と答えたのである。その時に夫人が思わず発したのが、この言葉である。ファインマンは、このような格式ばった茶会に不慣れで、真面目に返事したつもりなので、夫人の反応に面食らうのである。この会話のなかに、この本全体を貫く自由な発想と反形式主義の彼のスタイルがよく現れている。そして、ロスアラモスでの原爆開発に従事したときの経験談から、ブラジル、日本に滞在したときのおかしな体験談、ノーベル賞受賞にまつわる逸話などに加えて、ナイトクラブで女性を口説く方法、マリファナの効用など少し危ない内容まで、好奇心と探究心の赴くままに

書かれている。最後に付け加えられた「カーゴ・カルト・サイエンス」は、カリフォルニア工科大学の卒業式式辞で行った、「えせ科学」の見分け方についての講演である。非常に示唆に富む内容で、ここだけでもぜひ一読していただきたいものである。

ファインマンの研究スタイルは、ノーベル賞受賞の対象となった量子電磁気学におけるくり込み理論や、量子力学の経路積分による解釈など、難解な問題を簡単な方法で解くという、まさに天才的で奇抜な発想に基づいている。先輩や同僚の物理学者たちによる自分の発想に対する反論に対して、自説を堅持しながら物理学上の理論を確立していくというプロセスが、人間味と臨場感のあふれる筆致で記述されている。このスタイルは、日常生活においても貫かれ、生涯の間、「人がどう思っても、ちっとも構わない」という信条を持ち続けたのであった。

この本を読んで、もっと彼のエピソードを知りたくなったら、「困ります、ファインマンさん」が出版されている。さらに、友人たちによって、「ファインマンさん最後の冒険」、「ファインマンさん最後の授業」がシリーズの形で発行されている。もし、物理学を知りたくなったら、「物理法則はいかにして発見されたか」がある。さらに勉強したくなったら、カリフォルニア工科大学での講義に基づく、ファインマン物理学（力学、電磁気学、量子力学）がある。いずれも、ファインマンの丁寧かつ明快な説明が全編を貫く名著である。従来の教科書に飽きて、大学時代に読んだときに受けた新鮮な感動を、私は今でも覚えている。最後に、できればこの本は原書でも読んで欲しい。英語は平易で、ファインマンの才気あふれる文章に自然と引きずり込まれ、意味の分からない多少の単語があっても苦にならない。

(工学部教授・物理学)

コンドル『日本の生け花』改訂2版 1899年

Conder, Josiah. 1852-1920

The Floral Art of Japan: being a second and revised edition of the Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement / by Josiah Conder; with illustrations by Japanese Artists. -2nd and rev. ed. -Tokio: Kelly and Walsh, 1899. xi, 142, vii p., 69 leaves of plates: ill., figs; 37 cm. Full cloth.

著者コンドルはイギリスの建築家で1852年イギリスのロンドンに生まれ、サウスケンシトンの美術学校およびロンドン大学で建築学を学んだ。幕末から明治にかけて日本は西欧文明の文化、新しい工業技術の移植の奨励を進めていた。1877年(明治9年)にコンドルは明治政府の招聘で来日し、1871年(明治4年)設立で1873年に開校した工部省工学寮工学校を前身とする工部大学校の建築学の高等教育を行う造家学科で教鞭をとった。彼の指導の下で日本建築界の誕生期を担うことになる辰野金吾、片山東熊、佐立七次郎、曾禰達蔵らが育った。後にこの土木・機械・造家・通信・化学・冶金・鉱山の7学科の工部大学校は東京帝国大学工科大学(1886年)になった。コンドルは、鹿鳴館(1881-1883年)、ニコライ聖堂(1891年)、旧岩崎邸(1896年)ほかを設計して日本の建築界に影響を与えるとともに日本の固有の文化に対しても理解を示した。初版『日本の花と生け花の芸術』The flower of Japan and the art of floral arrangement. Tokyo: Hakubunsha; Yokohama: Kelly and Walsh; London: Sampson Low, Marston, 1891.の多少長かったタイトルを省略したのがこの改訂2版である。確かに『本書』の叙述からコンドルの日本文化に対する造詣の深さを知ることができる。彼は、日本の生け花の歴史的形が極東の異様に気まぐれな嗜好の結果ではないこと、それが自然界の法則への深い理解や日本人自ずからの自然観に拠っていることを明らかにした。西欧では石、煉瓦、材木、金属、塗装、あるいは漆喰などの特性を用いて家を造り、そして室内の装飾を行う。日本では自然に咲いている草花の切り花を生けて



王子の紅葉

室内に自然を表現する。『本書』によって欧米人は日本の生け花の〈方法〉と〈様式〉を理解することにより彼らの室内装飾にそれを用いることを学んだのであり、また実際、この頃には欧米ではその兆しが少なからず現れていたのである。

ところで本書には69葉の挿絵が添えられている。その中の14葉は日本の四季をテーマにした日本画家、尾形月耕(1859-1920年)の多色刷りの美しい挿絵である。尾形は明治のはじめに蒔絵の下絵や浮世絵版画を描き、後に新聞、雑誌に挿絵を掲載していた当時の流行画家で『月耕畫聚』(1901年)の作品がある。本稿にカラーで紹介できないのは残念だが、横浜近郊、杉田村の樹齢80年から100年の千本以上の梅や東京、王子の紅葉など、尾形が描いた「作品」、そこには庭木、草木が日本の四季とそれに纏わる祭事等を背景に人物描写がされている。その衣装、優しい眼差し、美しい庭園、室内装飾は今はずでに失われて再び見ることはできないが、そのひとつひとつが私たち読者に心の安らぎを与えてくれる。

(情報サービス課・吉田 隆)

23号館書庫移転を終わって

(1)23号館書庫移転経過

現在の図書館が建設されてから24年が経ち、蔵書冊数は収容冊数の75万冊を超え、図書館書庫に入り切らず通路に並べられるという状態が、ここ4、5年続いていました。そのため、書庫利用者に大変不便をおかけしました。

その中、懸案であった新書庫が今年の4月、23号館地下に完成しました。図書館書庫資料の一部を23号館書庫へ移転する作業と、図書館書庫の再配置を、準備作業を含め7月から8月にかけて行いました。その間は、図書館書庫が一部使えない状態になり、大変ご迷惑をおかけしましたが、9月の後期授業再開に合わせて通常運用に戻しました。

23号館書庫は電動書架で収容冊数23万4千冊です。建物の構造及び収容冊数を多く取るために高書架(10段・4連で高さ約4m・幅約7m40cm)の



電動書架になりました。

(2)書庫の分野別構成

23号館書庫への蔵書資料の一部移転に伴い、図書館書庫全体の再配置を行った結果、図書館書庫には和洋図書と理工学系の和洋雑誌を配架し、23号館書庫には、人文・社会科学系の和洋雑誌を配架しました。(ただし、和雑誌のうち政治・法律関係、新聞、紀要は図書館書庫に配架しています)

【23号館書庫に配架している雑誌】

人文・社会科学・芸術・言語・文学関係の和・洋雑誌

(和雑誌－P B000～P B309、P B330～P B399、P B600～P B999)

(洋雑誌－P A000～P A399、P A600～P A999)

※Chemical Abstract、アメリカの判例集、四庫全書、有価証券報告書、大型本・マイクロ資料の一部は、23号館書庫に別置しています。

【図書館B2F書庫に配架している雑誌】

政治・法律関係の和雑誌 (P B310～P B329)

自然・工学関係の和・洋雑誌

(和雑誌－P B400～P B599、洋雑誌－P A400～P A599)

新聞 (P B071)、紀要 (P B050.1)

(3)23号館書庫の利用について

資料の利用に際しては、コントロールカウンターで入庫手続きを行った上で、23号館書庫係りにお申し出ください。

23号館書庫は巨大な電動書架のため、入庫検索に際しては利用者の安全を考え、『利用上の注意』に従って利用していただくことになります。これまでの書庫に比べ多少ご不便をおかけしますが、安全利用のためご協力をお願いします。詳しくは、

コントロールカウンターにお問い合わせください。

(4) 今後の書庫について

現在、本学の図書館だけではなく日本の大学・公共図書館では、日々増大する資料をどう保管するかが共通の問題になっています。今回新しい23号館書庫ができ、図書館書庫の満杯状態は一応緩和されましたが、それでも図書館、23号館書庫と

も約3割のスペースしかありません。このまま蔵書数が増えれば10年ぐらいで図書館の書庫は満杯状態になります。新しい書庫を今後建築することが難しい状態では、電子資料への移行や他大学とのコンソーシアムなどを積極的に進めるとともに、重複図書などの資料の選択的廃棄計画を立て、使用価値がなくなった資料を廃棄していく必要があります。(総合サービス課)

下の写真は、平塚図書室内の風景の一部です。カウンター側から書架を眺めた空間の広がり表現しています。今年の8月以前は、同じ写真では、床が光輝き、そこに物を落としたり、硬い底の履物で歩くときには、全閲覧室に轟く音を感じたものです。この写真からは、そんな図書館の情景は微塵も感じさせません。もの柔らかで、落ち着きのある、読書の世界に深く浸透してしまいそうなたたずまいを感じさせます。

思えば、丁度2年前の今頃、談話室でもあるかのような騒々しい図書室を目の前にして、何が原因で騒がしくなるのか。また、学生は、この環境を望んでいるのか、を調べてみたのです。原因は、2週間で理解できました。利用者の会話よりもうるさい音が閲覧室を覆っていた



環境を整備

平塚図書室の

のです。その音は3種類。1つは空調、2つ目は床を歩く音、床を叩く椅子の足の音、3つ目はトイレ利用者の入室時の会話でした。学生は、この騒音を我慢して学習せざるを得なかったのです。ある学生は、図書室のうるささから講義室で勉強している友人がいる、と話していました。

平塚図書室は、8月を境に変わりました。「静けさと品位」を獲得したのです。上記問題の2と3が一気に解決したのです。柔らかな色彩の絨毯が敷かれ、トイレの入口を図書室外に移したのです。図書室から、そこに不似合い

な音が取り除かれれば、図書室本来の公共圏という性格が自然に戻って来るものであることを、真剣に読書に勤しむ利用者の真摯な姿が教えてくれています。

『〈帝国〉を考える』
アメリカ、東アジア、そして日本
的場昭弘編著、双風舎 B319-337

本書は神奈川大学において2003年10月から11月にかけて開催された神奈川区民講座の7名の講師の講演をまとめたものである。講師は2名を除いて本学教員であり、講師的場の経済学部教授が編者となっている。

この講座は〈帝国〉を考えるというテーマで行われており、専門分野の異なる論者が〈帝国〉をめぐる問題をそれぞれの分野から論じている。帝国という言葉が現在注目を浴びているのはネグリとハートの『帝国』という本によるところが大きい。帝国という概念は新しい言葉ではない。ローマ帝国、モンゴル帝国、大英帝国等歴史上多くの帝国が存在した。また、帝国主義という言葉が語られたのも20世紀である。この21世紀に〈帝国〉を語る意味は何か。この〈帝国〉という概念は経済、政治、文化において世界



規模のグローバルなシステムであり、冷戦後の世界で唯一地球規模の軍事力を展開するアメリカ合衆国がこのシステムの中心にいることは間違いない。的場教授はネグリの帝国の概念の意味を、藤原教授はアメリカの外交政策の最近の変化を述べる。宇波教授は世界認識そのものでもあるメディアの問題、中村教授は日本の戦後史を戦前との断絶ではなく連続として捉え、日本は憲法9条改正問題に見られるように戦後最大の岐路に立っていると語る。尹教授は日本人の歴史認識について問い、グローバル化以前に日本の周辺地域への戦後総括をすべきことを述べ、成瀬教授は世界経済のグローバル化の意味を問う。後藤教授はイラク戦争後のイラクの動向がアメリカの中東政策を占うだろうと語る。

結局、〈帝国〉を考えるということはアメリカや日本を考えるということでもあり、最近のアメリカや日本の動向を見る上で参考になる本である。

(K.N)

2004年度 第2回 図書館上映会と講演 「二神島 海の民の歴史」開催

- 日 時 2004年7月15日(木)
- 上映作品 『二神島 海の民の歴史』
- 演 題 「二神島を掘って」東国歴史考古学研究所長 田代郁夫氏
「網野善彦先生のこと」紀伊國屋書店映像情報部長 吉澤泰樹氏

今回は神奈川大学日本常民文化研究所が二神島での学術研究調査をもとに製作したドキュメンタリー映像を、上映会の企画に合わせて編集した作品『二神島 海の民の歴史』の上映とその製作と発掘に深く関った二人の講演であった。二神島は、愛媛県西部忽那(くつな)諸島南西部にある島で温泉郡中島町に属している。歴史家、網野善彦元神奈川大学教授は「たびたび二神島を訪れ、〈二神文書〉について勉強しているうちに、私はこの島が、中世の〈海の領主〉と海民との関係を考える上での好事例なのではないか、と考えるようになっていた」(網野善彦著『古文書返却の旅』中公新書・1999年64頁)と述べている。歴史的〈事実〉を知るといふことは何か。〈歴史叙述〉とは何か。〈歴史学〉と〈民族学〉はそれらをめぐってどのように補完しあうのか。それは網野先生の歴史的諸研究の根底で絶えず問われてきた諸問題である。

文書を読み解くこと、墓地の発掘から得た出土品を通して二神家が近世において武士から百姓に身分を変えたことが判明される。両者の講演から私たちが歴史を学ぶということの〈意味〉について、あらためて考える機会を与えられたと思う。網野先生が講演されている映像も上映されたが、先生が正に視聴覚ホールにいらっしやる様な不思議な想いに駆られた。中島町役場、商工会、二神重則氏をはじめとする二神系譜研究会のご協力に感謝したい。

図書館展示コーナー

『沖縄』 ～食・音・技の世界～

展示期間 11月1日～2005年3月28日

沖縄県は本土から遠く離れ、中国大陸や東南アジアに近いことから、その活発な交易の歴史により、独自の文化を築いてきました。今回は、沖縄県の食文化と音楽、伝統工芸（今回は染織のみ）を取り上げ、また一部ですが、深刻な自然破壊についても紹介していきます。

食・音・技の各コーナーでは、琉球王朝時代の伝統的な文化と、現代の新しい文化の両

方を楽しめる内容になっており、近年の沖縄の新しい文化も、美しく伝統的な文化があるからこそ生まれたものであることが、わかりたいと思います。沖縄本来の美しい伝統文化に触れてみて下さい。何か新しい発見が待っているかもしれません。是非一度ご鑑賞下さい。



図書館の利用案内

1. 『イラク問題』関係の図書を特設図書コーナーに配架

1階開架閲覧室の特設図書コーナー（就職・資格本図書コーナー）横に、最近出版されたイラク問題関連の国内外図書を収集し配架しました。イラク問題は単にイラクだけの問題ではなく、中東全体、世界全体の政治・経済面に大きな影響を与えています。ぜひご覧ください。

2. 冬季長期貸出について

冬休み長期貸出を次の期間行います。

貸出期間：12月6日(月)～12月25日(土)

返却期限：2005年1月14日(金)

3. 年末年始の休館・休室について

12月26日(日)～2005年1月7日(金)

4. 情報リテラシーセミナー開催（'04後期）

【企画セミナー】

「レポート・論文作成に役立つデータベース」をテーマに、情報リテラシーセミナー室を利用した専門講師による企画セミナーを実施しています。

開催日：10月25日(月)、11月8日(月)～12日(金)

16日(火)～18日(木)、30日(火)。

【個別セミナー】

「データベース活用・OPAC利用セミナー」を11月19日(金)～12月17日(金)の期間で実施しています。

※申込方法等の詳細は、図書館ホームページ、掲示をご覧ください。

書架から

30年程前、放浪の俳人山頭火ブームのなかで出版された『定本山頭火全集』

全7巻がある。山頭火は、明治15年山口県に生まれ、10歳のときに母を井戸への入水自殺で亡くして以来、長く不幸な生い立ちを過ごし、大正3年には出家し、生涯の多くを行乞の旅と句作に生きた俳人である。彼には〈分け入っても分け入っても青い山〉という有名な句がある。彼は九州、山陽、山陰、四国、そして東北までも旅をした。山頭火は、ひたすら鳥や虫のように野に死することを願った。一方、彼は水に沿い、水音に惹かれて歩く。〈しづけさは死ぬるばかりの水が流れて〉。山頭火の残した1万1千余句とともに、漂白の旅にでるのも読書の秋の楽しみかもしれない。
(K)